

2018年度GTセミナー 第47回保育環境セミナー 2018.7.9～7.11 前編

第72号 2018年7月16日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

第47回保育環境セミナー

2018年7月9日～11日に第47回保育環境セミナーが
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から150名程の先生方が集まり、各園の実践発表や園見学、
意見交換会を3日間に渡り行いました。

1日目 2018年7月9日(月)

- 10:00～ 園見学
- 13:30～ 見学園紹介
- 15:00～ GT活動報告
- 15:00～ 休憩
- 15:30～ 講演
- 17:15～ 意見交換会

2日目 2018年7月10日(火)

- 9:00～ 実践園報告
- 9:30～ 見守る保育の5つのポイント
- 11:45～ ミマモリングソフト紹介
- 12:00～ 昼食
- 13:00～ ドイツ報告
- 14:00～ Q&A
- 15:30 終了

3日目 2018年7月11日(水)

- 10:00～ 園見学



基調講演 『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

みなさんこんにちは。さっきまで中国にいたとは思えないくらいだが、海外進出は考えていません。ただ、日本がなかなか保育を変えないことが多いので、海外の方が先に変えようとしている、と言うことを言って日本をよくしたい思いがある。ですから、海外進出は思っていないが海外は早い。中国は本当に速い。あの、がつつ感私からすれば、ついていけない。あのパワーでやっていくのだと思うが、その中で、講演した中国が世界の経済を担っていけるかということに、経済大国になるか二つに分かれている。一つは世界の中心になる考えとして、一つはアメリカの5倍の人口位ある。富裕層が多く、格差が激しい。しかし、私からすると心配がある。モンテの園に行った時にその園は月謝が30万、年間300万くらいし、しっかりモンテをしている。ローマにも派遣し職員研修をしているし、教具もそろっており、素晴らしい保育です。その実践のビデオをうちの職員に見せた。給食の場面を映したが、テーブルクロスを畳んでいるものを広げて、隅の刺繍があって机の角に合わせる。それを整然としているのを見たときに、ロボットがやっているといった。モンテでは仕草、お作法をすることで運動機能をつけようと開発した。私の園の職員の一人が子どもをモンテの園に通わせていてきちんとしている。その園では、テーブルクロスがめくっていたのを他の子が直そうとしたら、手伝わないでと言われたそう。それは全部きちんとやることで手の運動機能をちゃんとする意図があるから、手伝ってしまうとそれが欠けてしまう。私の園を見ると、うちの園では刺繍がないのでテーブルクロスが偏ってしまったり、子ども同士あだこたえ言いながら直している。今後そっちの力な気がしている。みんなであだこたえ、これじゃ落ちちゃうというやり取りが大事と思った時に現在、中国で進めている保育は人口がアメリカの5倍あるということは、アメリカの5倍失業者出るのではないかと思う。早くから子どもには、どんな力が必要かを考えた方がいいかの講演だった。聴いている人の中でモンテの人が多く聞きに来る人がいて、モンテがいいか悪いかではなく、時代的に変わってきている。時代的に変わって考えないといけないのがシンガポールで講演した主催者の考え方が素晴らしかった。シンガポールは世界一学力が高いと言われ教育に熱心。韓国、中国、シンガポールでも講演をしたが、大学受験が激しい国で、幼児の頃から受験の勉強をしている国がなぜ見守る保育を取り入れたかと言うと、園児が来年大学を受けるなら今のままでいいでしょう。現実には10年、15年後に大学入試を受ける。そうすると10年、15年後の問題は今のままでは通らない。見守る保育をすることで、その対策をすと言っており、私が提案していること。中国で議論したことですが、一つはエリートの子たちがいる。私が行った園のところは140園くらい運営しているところでエリートの園。エリートのところは別のところもあり、私は実際に大学を受ける頃にエリートの子と、見守る保育をしたかでは、受験では見守る保育の方が通るという話をした。私たちがしている仕事は今の子どもたちが小学校で成績がいいとかではなく、世の中に出たときにどういう力が求められるか大きく2つ問題がある。

—社会に出たときに求められる力—

1つは、子どもの環境が変わってきていること。そして、その環境に対して必要な力が欠けてきている部分がある。最近の研究の結果がある。赤ちゃんの研究。乳児の研究が進みその結果、毎日、多くの論文が出されている。新しい

知見に沿わないといけない。これからAIの時代になる時に、今ある仕事のほとんどがなくなる。なくなるということは、子どもたちは今ない仕事に就くことになる。新しい仕事を生み出されてくるのではないか、そこで発揮できる子にしないといけない。2つの大きな観点は指針の改定の理由にもなっている。指針も2つの理由が改訂のポイントで、時代遅れのところもあるが、そこを目指している。その一つ目。赤ちゃんの研究についてだが新しいポイント。赤ちゃん・胎児から含めた研究が進んできている。かつては、赤ちゃんは対象としては難しく、本人が言わないと難しいと進んでいなかったが、最近は視線から見ることから研究され、胎内にいる赤ちゃんからも分かり、研究されるようになり、MRIによっても分かってきている。多くが例えば、赤ちゃんは心理学で影響しているのがピアジェだが、割と正しいことを言っているが、違っていることとして言われることとして、いつごろからできるかということに関しては、もっと前からできると言われている。最新の知見が出てきているが、大学の先生は忙しいので新しい知見を学ぶことが少ない。子どもの姿からではなく、過去の論文から考えることが多く違っていることが多い。まず一つが提案する大きいポイントは、愛着の考え方。最近の研究で分かっているのは多く絞められているのはボルビーの二社関係愛着で、母子との愛着形成を持つことがいろいろな政策に影響し、保育園だと担当性と言われ、里親性、虐待されても親がいいという考え方は、ボルビーの愛着性を元にしてはいるが、最近の研究では二つあると言われ、赤ちゃんが生存するために愛着形成を持つためには、どんな形が愛着かではなく、赤ちゃんは置かれている環境に順応する。もし担当性であれば他の人では不安な気持ちを表すと言われ、担当性の人が、「他の人では不安になるでしょ？」と言うのは、赤ちゃんはそういう環境が与えられればそうなると言われている。一方で複数の愛着を持つと、いろいろな人と愛着を持って色々な人に助けを求めるようになる。

—ドイツでのオープン保育—

ドイツではオープン保育が広まっているが、子どもはどこの部屋でどの先生の前でも自由であるという考え方で、乳児園でもオープン保育をしていて私たちが考えている愛着と全く違く、どの先生も選べ、優先順位があり気が合う先生の所へ行き、それは赤ちゃんが決めることで大人が決めることではないと考えている。複数と愛着を持つと言われ、特定の人という考えはなく、だからと言って不安はなくどこで愛着を持てばいいかは赤ちゃんが決めると言われている。赤ちゃんがどういう生き方をするかを学んでいると言われ、将来社会の中で生きていくのがホモサピエンス。特定の人と愛着を持ってしまうと、社会に出る時に困難になってしまう。小学校へ行っても、学童へ行っても特定の人に愛着を持とうとするし、小学校の壁と言って、親たちは働くことが困難になってしまう状況がある。そういう意味から個人の愛着ではなく、社会的ネットワークの中で子育てをするべきである。親が一番の考え方を脱しないと虐待が起きてしまう、何度も保護され、問題になっても親の元へ帰ってしまう。日本くらいで他の国ではない。赤ちゃんは他の人とでも順応する力を持っているということを、ハーレーという人が言っている。日本では戻して悲惨な事件が起きてしまう。もともと、社会の中で子育てすべきと言う考え方で、私もなんでそういう考え方かと言うと、北京の講演でAIが人に代わり、どんな時代になるか見当がつかなくなる。それを考える上で、先を読むのではなく人類の進化から考えることが大事で。最近は進化と発達心理学を合わせた、進化発達心理学や人類学から考えようということが世界で起きている。そもそも人とは何かを考える。皆さんには、こういうことを考えて欲しい。

—人類の進化—

土曜日に赤ちゃん学会での発表で、私たちホモサピエンスは人族の一種類です。私たちはサルから進化したわけでもなく、同じ先祖を持ったホモサピエンスの一類で、ある時期、地球上にアジアに原人たちが住んで、ヨーロッパにも別の種が住んでいた。世界中で頭がよくて運動神経がよかったのはネアンデルタール人だった。私たちホモサピエンス以外の人族は全て地球上から全滅した。今、NHK『人類誕生』が放映されている。第1回目で、ホモサピエンスも死の危機になり、海に出て貝を食べてみようと思ったのがホモサピエンスだけ。人族の中で好奇心が強かったと言われ、生き延びる知恵を生んだと言われ子どもたちが受け継いでいる。これを大事に伸ばすことが大事で、新しい指針では「非認知能力」と言われている。好奇心、興味関心、探究心は「学びに向かう力」がホモサピエンスには強くある、子孫を残すためには、その時代世界でもそうだが、一夫一妻か一夫多妻の二つがあるが、多く子どもを作るのは一夫多妻の方が有効だと思うが、ホモサピエンスは一夫一妻の方が生き延びている。それは育児は、夫と妻共同でするものと言われている。一夫多妻は、妻一人で生き延びる可能性がきつかったと言われている。第2週目の人類の誕生では、ネアンデルタール人とホモサピエン人がある時で会うがほとんど戦っていない。なぜ、ネアンデルタール人が滅んだかと言うと、頭がよく運動神経もよかったのであまり集団を作らなかった。ホモサピエンは集団が大きくなり知恵を集めたと言っていた。石器を両方使うが、ネアンデルタール人は力があるからずっと形が変わらず、力づくでやって集団が小さかったので智慧を出さなかったと言われている。ホモサピエンスは集団が大きくなることで、知恵を出し合い工夫して脳が大きくなったと言われ、集団で生きることが大事と言われている。集団で生きるには個人の中では自分の気持ちを我慢をしないといけないが、その中のメリットは知恵を出し合い、助け合うことが結果的に生き延びる力になったと言われている。第3週目は今月放映されるが、私たちは集団を形成する生き物で、集団の中で子どもを育てて来た。

—共同保育—

最近、0歳児の保護者が保育をキャンセルする人たちが増えて来た。育児休暇が2歳まで取れるようになり、政府は3歳まで取らせようとしているが、赤ちゃんを育てるのはお母さんが一番と取らせようとしているが大きな問題があると思っている。日本は少子高齢化で問題だが、これを3歳まで育休をしていたら3歳まで次の子を産まない。育休を取ることでもっと少子化を促してしまうのではないかと、もっと大事なことは人類は短い出産期の中で多く産まないといけない。そのためには毎年産むしかない。おじいさんおばあさんは、6、7人兄弟がいたがそれで維持できたが、そのためには次の年に子を産まないといけない。9か月くらいで膝からおろして離乳して下に降ろすことで次の子を身ごもる。降ろされた赤ちゃんは1人では生きて行けず、人類は9か月くらいになると共同保育をしてきたと言われ、他の霊長類と違うところでチンパンジーは4歳、ゴリラは7歳までお母さん一人で育てて来た。9か月するとトマセロさんは他社認識をしたり、他社の意図が分かるようになると言われている。社会で生きていくためのソーシャルブレインを育て、人類は社会を作って生きて来た生き物のだから、それを赤ちゃんの頃に学ぶ。子ども同士の学びで脳を拡大していく。最近分りはじめていることで、私たちは脳が大きいですが、二足歩行するために骨盤がお椀型になり小さくなってしまふ。生まれる前胎内で1/4育て出産し、生まれた後に脳を拡大している。犬や猫は100%育てから生んでいる。生まれてから拡大するのは、乳児保育が環境によって脳の機能を影響させている。この時期にお母さんとだけいると、脳の拡大がされなくなってしまう。お母さんがいいというのは、家にいるから守ってくれるという確信が必要なのであって、人類の進化から見ると、9か月から共同保育をされてきている。京大の学長の山極さんなどは霊長類の出身なので、共同保育を

してきた形を作るべきだと提案してきている。2、3歳まで家で育てていたら、チンパンジーと同じになってしまう、サル化してしまうと言っている。社会的な生き物にならないといけない。

—脳の機能の発達—

今回の指針で乳児保育と1歳～3歳未満のことが書かれている要因になっている。脳の拡大のグラフ、赤ちゃんは生まれたのと同時にどんな風に脳が拡大するかが指針の改定の時に出されたグラフ。これはよく出しているの、お分かりだと思う。まず注目してほしいのが、エモーションコントロール。中国でも話したことだが、家で子どもが我慢することをさせない、ストレスを掛けまいとする。そうするとエモーションコントロールが拡大しない。これは子ども同士でないと脳が拡大しない。セリグマンと言う鬱の研究の人が、マウスの身体に50%の確率で死ぬ肉腫を植え付けた。1つ目のゲージには、電気ショックを与え苦痛を与える。2つ目のゲージには、電気ショックを与えるがあるスイッチを押すと止められる。3つ目のゲージは平和に暮らした。飼育を開始ししばらくすると半分死んだ。これは当然で50%の肉腫なので当然。1つ目のゲージでは7割死にストレスが増した。2つ目のゲージは、2割しか死ななかった。3割は止められる力を使ってがんを治した。末期のがん以外は自分の気持ちで治すことが可能である。これには負けたくないと思うことで、影響する。自分で解決できるかどうかポイントと言っていた。今の親はストレスを掛けまいとする。そうではなく自分で困難を乗り越えられることが大事と言われている。この時期大事でこのストレスは何かというと、子ども同士の関係のストレスで親が起こって寝てもこの力はつかない。親が我慢させてもただのストレスで、他の子ども同士の関係で力がつく。これが今アメリカなどの犯罪でも脳が委縮しているから事件を起こすと言われている。気をそらすのは重要な方法と言われている。集団の中で自分の感情をコントロールすることを覚えている。相手の思っていることを実現させようとするのが自立を促している。自立は自分で何でもできることです。2歳児では排泄の自立、清潔の自立、食事の自立がある。ただ何のために出来るようになるか。人は支え合って生きるために自立が必要と書かれている。社会を支えていくために必要と書かれている。これが乳児保育の重要なことだと思う。指針では重要と言いつつもまだ甘い。0歳から子ども同士の関係が大事だと思っている。異年齢の共同保育の1つ。これが母子の中で育てていたら、育たない。中国の人が見学に来た時に1歳児がタオルを仕舞うと言ったらウソだと言われた。1歳では歩かないと言われた。1歳児は歩くことさえしないと書いていたが、共同保育が大事なのは、これから3歳まで育休を取って母子だけで部屋にいると社会に出たときは危ない。ボルビーの考え方があるが、もっと社会的ネットワークの中で育てようというのがある。英語の本では、dyad (ダイアド) 2社関係からソーシャルネットワークへと言うことを提案している。十分、赤ちゃんからこういうことができるし、やってあげてしまうと赤ちゃんがこんなことをしてしまうと思えない。先回ってしてしまったら出来ないと思込んでしまうが、自分からしようとする。解決しようとする力。そのためには人をやってあげる気持ちも分かってあげる。これが01歳のときから行われる。脳機能の拡大が色々な分野で現れているが赤いグラフの線は言葉・言語。これらはお母さんの中でもまだつくが、子ども同士でもつかないのはピュアソーシャルスキル (社交性・協同性)。これは2歳くらいから。子ども同士が徒党を組み楽しさを知る年齢。これが将来の社会の基礎となる。これには、まだまだ指針の中には保育者を介してと書かれている。1歳はまだまだ並行遊びと言われ、別個に遊ぶと言われているが、関わり遊びの前の準備の遊びだと思っている。人を意識して遊び始めている。丸いテーブルで別個で遊んでいる。しかし、ふと前で遊んでいる子を見ると、同じように入れて遊んでいると自分の方が近いからと入れてあげようする。

そうすると他の子ども来て、遊びはじめる芽生えだと思っている。並行遊びは関わるための遊びだと思っている。決して保育者を介してはいなく、子ども同士で遊んでいる。

—環境を通した保育—

指針には、保育者を通してと書かれるがテーブルで相手の遊びが見えるようにするだけでも違う。指針の改定の前に考えないといけないのが環境。これが実は最近はだんだんの園でもやるようになったが、平成2年に幼稚園教育要領の改訂に伴って打ち出されたのが、指針で幼児教育は環境を通して行くと打ち出された。これが今回の改定でも繋がっている。先生が子どもに何かする、教えるのではなく、子どもが発達するような環境を用意する。そのために子どもと共に教育環境を用意すると書かれている。例えば、私たちはハイハイを教えようと思ったら、こうするんだよと教えるものではない。ハイハイをするような環境がないといけない。ハイハイをするためには動機がないとできない。なぜ行きたいか、自分の興味のある玩具があるとか、抱っこされたい先生がいるとか、それを先生が環境を用意する。まず広さが大事。空間的環境。日本は狭いのですぐつかまり立ちをしてしまう。ハイハイをちゃんとしないと問題がある、ハイハイすることで肺や心臓など内臓を強くし立ったときに胸板が強くなり、かけっこをしても胃や肺が強くなるのが一つの理由。四つん這いでなことで、腰や首が強くなり、そうでないと姿勢が悪くなる。3つ目は転んで脳を打ってしまうから転んだ時にとっさに手をつくように練習をしていると言われ、大体1年くらい必要で、そうすると歩き始める。広さが必要なので最低基準としてハイハイする場所を広くとるように国では3、3mと言われ、東京では5mと言われている。ある県の園でハイハイが出来るよう5mにしましたと言われ、園を見に行くと0歳児室は広くとられていたが、現場で観ましたか？先生が抱っこして歩く距離に使っているといった。先生が遠くにいて呼ばないといけないのに、先生が歩くための距離でしょうかと言った子とがある。そうではない、少子化になると大人が子どものそばにいる。親も子どもの近くにいる先生をいい先生と言ってしまう。近くにするとハイハイしない。もう1つが最近の赤ちゃんはハイハイをしなくなった。仰向けで寝て何で寝返りをするかと言うと、首を上げて、ずり這いをしてハイハイをするが、今はうつ伏せは突然死をするから、してはならないと指導される。うつ伏せになると、仰向けにしなさいと指導されるが、アメリカの小児の研究所の項目ではうつ伏せにさせることが質がいいと言われている。科学的な研究がないし内臓に大事なものがあるわけで、人にさらして寝ることは本来生き物はしないはず。赤ちゃんをおんぶしていたのは、きっちりつけていたし突然死はしていない。ですが日本ではうつぶせ寝をしてはいけないと言われるが、赤ちゃんはハイハイをしなくなっている、転んだ時に手をとっさにつくことができない。それも本当のことが分からないが、ハイハイは重要であることは確か。赤ちゃんの大事なのはそういうことが出来る環境を用意することで、大きな年齢になっても同じことで指針の中に書かれているが、これまでの指針には発達の項目には子どもは自ら環境に働きかけて、相互作用によって発達する。

—コーナー・ゾーン—

自ら働きかける環境を用意することが先生の役割で、かつてはコーナーと言っていたが、子どもが絵を描きたいと思った時に、自分で分かって行ってそれをやれるようにしておく。1日中ということではなく時間の用意。環境の中には時間も用意する。これを今日は遠足の絵を描きましょうと10人の子に画用紙を渡して、お道具箱から絵を描きましょうと言っても発達はしていかない。子ども自ら、書きたいと思っていつでも描ける用意をしておく。これがコーナーと思っていたが、最近はゾーンと言う言い方をしているが、自分のやりたいと思えることをどこでもやってもいいという考え方。絵本

は絵本コーナーで、制作は制作コーナーでと思っていたが、恐竜の図鑑を見ながら制作をすとか、そこだけになさいでなく、持ち出しは自由。ただし元に戻さないと次の人が困るのでコーナーからゾーンという意方に変えた。自ら働きかけてやりたいことをやれる。これは環境を通してと言うこと。

—保育士の仕事—

その中で赤ちゃんがどうかと言うと、園に行くと色々なゾーンを作っている園もあるが私からするとそれはいらんと思っている。2つ理由があって、赤ちゃんがこんなことをしたいと思った時に這っていくわけではなく、目についたものをやりたがるので、目につくように置くことの方が大事だと思っている。寝返りする赤ちゃんには散らばせておくことで取りたいと思うので、寝返りをしたり這っていくように、目的が先ではなく、目についたものをやりたがる。遊んでいたら当然次に目についたものに行きたがるので、片づけていきなさいは酷で、先生がすべきで、子どもがやりたいところへ行くのは当然。ただ、次にやらないでポーとしていることに一緒に片づけるのはいいこと。それから1歳児が大事なのは見立て遊び。色々なものに見立てて遊ぶのでこっただけで遊びなさいではなく、チェアリングもおかずに見立てることも、積み木を電車に見立てることもある。ブロックはブロックのところ遊びなさいではなく、色々なところで見立てていいと思っている。1歳児になると探索活動をしたがるので、やれる環境を用意する。3・4・5歳になると、やりたいことがどこに行けばいいか分かるゾーンを作るが、0歳の時は目についたものに行くようにハイハイをすとか、寝返りをすように散らばす。1歳では見立て遊びをするので、いろいろなものを持ってって見立て、探索活動をするためにいろいろな場所に行けるように保障するとかのようにして、年齢の発達を促す環境を用意するのは私たちの仕事で、何かをさせようではない。環境を用意して子どもたちがやりたいと思ったことを膨らませたり、2歳になったら子ども同士を繋げ、深めたりする。子どもたちのやりたい気持ちをやること、心情・意欲・態度が保育の原理原則。

—保育所保育指針改定のポイント—

元に戻り、これを前提に指針の改定の1つが乳児の大切さ未満児の大切さ。もう1つが指針に書かれている年齢は満年齢で書かれている。当たり前に見えるが気を付けないといけない。乳児保育の所では0歳児です。0歳児は満0歳児ですので、誕生日が来たら1歳以上3歳未満のところを見ないといけない。ほとんどの園は育休明けでくれば1歳児過ぎです。そうすると0歳児の保育の所を参考にすのではなく、1歳以上3歳未満を見るので5領域に分かれています。これは当たり前のようにだが気を付けないといけないのは、育休で1歳まで必ず取るようになったら0歳児クラスはいらなくなるでしょうという人がいるが、大きな間違いです。例えば7月に1歳になる子がいます。育休を取って1歳になった。園に8月に入れようとして。8月で入れるとしたら入るクラスは0歳児クラスに入るんです。1歳になって園に入っても、今の日本の制度では4月当初のクラスなんです。7月の誕生日に来る子は0歳児クラスに入るんです。1歳まで育休を取っても0歳児クラスは必要です。2歳まで全員が取ったら0歳児クラスは不要ですが、0歳児保育はまだ必要なんです。日本でいう0歳児クラスは1歳になった子がいっぱいいますので、1歳になると他者認識をし、他者の意図を認識し、集団認識をする年齢になります。0歳児クラスから子ども集団が必要です。0歳児クラスで、先生と子どもがいつもべったりして二者関係で保育をすることではない。それから、人類は8、9か月になると離乳をしているわけで、0歳の赤ちゃんのほとんどを抱っこする必要はなく、まだ授乳をしている赤ちゃんの話です。ただ問題は、もし赤ちゃんが不安になった時、抱っこを求めてきたらしてあげることが必要です。しかし、不安になる状況を

作ることは保育では気を付けないといけないので、安定していたり一人遊びをしたり、他の子と関わって遊ぶのであれば、あえて先生は介入せず、いつでも受け入れられるようにしていく。赤ちゃんは自分で出来るようになることを喜び、やってもらっていると依存してしまう。やってもらったら楽と言うのは大人の考えで、赤ちゃんは自分でやることを喜び、出来なくてもやりたがる。そうすることで出来ないことは頼みに来ます。例えば、袋にタオルを入れる時、子どもができないときに先生の二通りの行動があります。子どもがやるような方法を教えてあげる先生と、さっさとやってあげる先生がいます。どっちがいい先生か。私は前者の方がいい先生だと思います。韓国へ行ったら服の畳み方が前に写真が貼ってあって、子どもに先生がついて、こうやって畳んでいくんだよと教えています。手順を教えるのがいい先生だと思っていました。そうすると手順を教えて自分で出来るようになります。しかし、自立のもう一つの目的があるとしたら、どっちがいいか私は疑問に持ち始めました。二通りの先生がいて、うちの園では頼んだらすぐやってしまうが、子ども同士でやっている時はあえて介入しない。言われたらすぐにやるためには、頼まれやすいようにいないといけない。これが先生と言う環境の在り方。1歳児が袋にタオルを入れようとしますが、全然仕舞おうとせず先生の所へ広げてと言ってくる。その時先生はすぐに広げてしまいます。やってと来たらすぐ広げてあげます。1歳に頼まれたら教えなくてもやってしまう。すぐやってあげるにしても手順を教えるようにしても次第にできるようになります。すぐに頼むけれど、自分で出来るようになると子どもは頼んできません。例えば6か月後、まだまだやってもらおう子もいるが、自分でやりたいと先生は分かっているのでわざと先生はふらつくが、頼まないのは自分で出来るようになったから。自分で入れられるようになったら、いくら頼もうとしても自分で入れるようになったり、友達に頼むようになる。仲がいいわけでもないのに子ども同士でやってあげるのは、すぐに先生がやってあげた方がこういった姿が見られる。手順を教えると自分でやるのは早いですが、人にやってあげるようにならない。先生がやってあげると、こうやってあげるんだと分かる。他の子でも先生の所へ行かず、さっきやってもらった子が見かねて、他の子にやってあげている。この頃になると、不思議でなんで先生の所へ行かないのか。そういう時にもう一つ、奥の方で何かしている子がいて先生が見ていたら、先生も聞きに行きたくなるが、子どもから頼んでいないので先生もそこへ行かない。頼まないとやらない。これを応答性という。頼まなかったら言わない、ただ危険がないかだけを見ている。そうすると先生の所へ来て、やってと来たから先生はやってあげる。先生に頼むことをわかってきている。自分でやるようになること、人にやってあげること、先生に頼むことが基本的に自立。そのためには頼まれたらやる。頼まれなかったらやらないということ。

—最新の赤ちゃん研究—

最近言われている集団的敏感性、情緒的利用可能性と言うことが海外で提案されている集団保育の在り方です、情緒的利用可能性は愛着関係の遠藤先生が訳した言葉だが、大人はいつでも利用可能な存在で構えています。子どもが頼んだらやってあげるスタンスが大事であると提案している。愛着は一緒に遊ぶことではなく、赤ちゃんが必要な時にやってあげる用意を示すこと。私の園では、食事の時に遊んでいるのを切り上げます。手を洗った子がタオルで手を拭いて、エプロンを探して席に座ります。この手順を知っているので自分でしようとするが、手が洗えないなどの困難があった時に、先生が流しの所、エプロン、いすの所、集まったところに先生が散らばっています。それぞれの場所で子どもが頼みやすいように、先生は先回りしてやってあげないこと。困っていても自分から頼まないとやらない。それを察してやってあげることをしない。子どもはちゃんと頼む。やれるときは自分でやる。これが最近提案される愛着の考え方。負の状況に陥った時に駆け込める場所としてこれを複数持つことが大事です。私の園で男性保育士がダメな子がいた。0歳児に男性の保育

士がいたがその先生が抱いたら泣く。問題なのは6月に父親保育と言うお父さんだけ保育する日があって、絶対泣くだろうと思っていた。自分のお父さんにはいいので、かつらやひげを用意したが駄目で泣いてしまった。その泣いて仕方ない赤ちゃんが、這ってしがみついたのが普段泣いている男性保育者だった。一度も抱いたことがなかったのでオレでいいのと思ったようだが、赤ちゃんは泣き止んだ。お父さんに渡そうとしたら泣いて、必死に先生の所へ来る。生まれて初めて抱くことができ先生は感動していた。普段は優先順位が低かったが父親保育では一番高かった。先ほどの赤ちゃんの研究で愛着は複数持っていて、赤ちゃんは優先順位を決めている。そうでないと生きるためには一人だけと決めてしまうと危険。一人だけだったらトイレにも行けない。不安になってしまうことがある。と言うことで最近の乳児の研究から大事さ、今回の指針の大事さがある。

—教育改革—

もう一つ大きな改定の重要なのは大学入試が改革される。人工知能が進むにしたがって、センター試験がなくなります。中国でも話をしている、大学入試の改革が進んでいます。知識を問う問題を止めようとしているといたら馬鹿にされ、「未だにしていたんですか？」と言われ、中国では暗記して覚える試験はしていないと言われた。マークシートは採点のこともあって知識を問っていたが、2020年に廃止される。新しい学力観が提案され高校、中学、小学、幼児教育を変えたのが今回の指針の改定の1つです。大学まで一貫した教育をしていきましょう、幼稚園・保育園も教育の内容が全く一緒。幼稚園は教育で、保育園は福祉とか、そういう考え方が全くなくなって教育はどこへ行っても全く同じ。小学校へも連携で小学校と仲良くなりましょう、連携を取りましょうだったが、今回の指針ではそうではなく、子どもたちの育ちを小学校へ円滑に接続していきましょうという風に変った。そのポイントとして10の姿を書くようになった。これを小学校の先生と共有して繋いでいきましょうとなった。これが新しい指針の2つ目のポイントです。本当は0歳から上にあげていくべきなんだが、今回は大学から順に幼児教育に降りてきて無理なところもあるが、円滑に移行していきましょう。その中で小学校の1年生も幼児教育の手法を取り入れ実際の体験やアクティブラーニングというように自ら体験し、経験から学ばせることを低学年にしましょうとなった。座って知識を覚えるのではなく、体験するような教育に変えていきましょう。自分で何をしたいのか、どう思っている子にいきましょうと小学校も変わって来た。そして円滑の移行のために幼児期に何をすべきか。10の姿だけでなく、色々な事が書かれています。実は幼稚園の方に書かれているのではなく、小学校の学習指導要録に書かれているので読んでみるといいと思います。幼児期にこんなことを体験してきている、小学校では図形を習います。幼児の頃散歩へ行ったら、葉っぱの形、虫の形、様々な形に注目し体験してきている。それがどんな形かを学ぶのが小学校。形の違いの特徴を身をもって体験してきている。それを踏まえて、その名前を教えていきましょう。この間ある園で話していた時に調理がそれを踏まえて、おにぎりの形を三角や丸にしたりしていると言っていた。それはいいことだと思います。もっといいのは「丸いと転がって困るね！」と先生が言うと、よりいいです。調理だってそういうことに関われる。四角いおにぎりをうちでは軍艦巻きと言って、お寿司みたいに海苔をつけることがあるが、もし皆さん時間があったら調理の先生にお土産で河童橋に売っているので、一遍に10個くらい軍艦ができるので、四角いおにぎりしてみたりと、こういうことを幼児期に体験させることが大切で、改訂のポイントになっています。乳児・未満児の大切さ、小学校への円滑な接続が今回の大きな改定のポイントです。これは私たちが前から提案している保育に共通していることで、私たちからするとそう新しいことではなく、私たちがやっていることがスタンダード化してきたなという想いをしています。色々な実践を交換し、おやつの出し方・やり方ではないがこんなことをしています

とか、時間の認識をするためにこんなことをしています、と情報交換していくといいと思います。この後懇親会があるが情報交換もあり、最初は地域ごとを知ってお互いに学び合ってより良い保育をしていけたらと思います。指針の改定を踏まえてお話をしました。今日はお疲れ様でした。

本稿は、2018年7月9日に行われた第47回保育環境セミナー2018の講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)